

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370275

研究課題名(和文)18世紀における環大西洋(ポスト)コロニアル英文学

研究課題名(英文)The Eighteenth-Century English Literature of Trans-Atlantic (Post)Colonialism

研究代表者

久野 陽一(KUNO, Yoichi)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：40242888

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：当該テーマにしたがって文献を調査・研究した結果、主に以下の通りの主題に関する成果があった。奴隷貿易廃止運動に関連する物語や環大西洋を舞台とする物語群とオリエントを舞台とする物語が、近代のヨーロッパにおける植民地主義あるいは帝国主義的な流れに対応しながら、同時に文学史的には近代を代表する小説の成立とも深く結びついていることを示した。

研究成果の概要(英文)：As a result of investigating and studying according to this theme, there were results mainly on the following theme. The stories related to the abolition movement of slave trade and of the trans-Atlantic setting and the stories set in Orient, while responding to the colonialistic or imperialistic flow in modern Europe, at the same time in the history of literature, are closely associated with the formation of the novel which represents the modern.

研究分野：人文系・文学・英米文学

キーワード：英文学 18世紀 コロニアリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、これまで研究の出発点として、18世紀イギリス文学において主流をなした、いわゆる「感受性」の文学、特に Samuel Richardson, Laurence Sterne からセンチメンタル小説に至る文学を中心に研究を行ってきた。そして、その底辺には、広く文化的な価値観として、常にある種の倫理・道徳といってもよい美的価値判断が存在することを見出した。端的な代表例を挙げると、何らかの苦痛を感じているヒーローやヒロインに対して読者が同情あるいは共感する場合に見られる価値判断である。

しかし、同時代の文化的な背景を研究するにつれて、このようなフィクションとは別に、現実の奴隷貿易と奴隷制度が生み出した悲惨な状況を英語で語る Olaudah Equiano などのアフリカ系の作家が活躍していたことを知るに至った。こうしたアフリカ系作家の作品を読んだ大半の白人読者たちの感受性は、白人作家たちの作品がもたらしたそれといかなる関係が認められ、それが文化全体をどのように変容させたのか。このような着想から本研究の研究代表者は、「18世紀アフリカ系イギリス作家と感受性の文学」という課題で、平成 18~19 年度科学研究費補助金(萌芽研究)によって研究を行った。その成果の一部は、「「彼ら」と「あなたたち」の『興味深い物語』- オラウダ・イクイアーノのセンチメンタリズム」(『英語青年』150 [2005]: 609-613) 及び「『興味深い物語』のジェンダーと起源」(『日本ジョンソン協会年報』29 [2005]: 12-16) などの論文として発表された以外にも、日本英文学会第 78 回大会(2006 年 5 月)のシンポジウム「英文学と<文明化>の変遷」において、「感受性と文明の境界」として口頭発表された。この研究は、さらに「18世紀アフリカ系作家と奴隷貿易廃止運動の文学に関する研究」という課題で、平成 20~22 年度科学研究費補助金(基盤研究(c))によって継続された。その成果の一部は、「イグネイシアス・サンチョの静かな生活」(『十八世紀イギリス文学研究 [第 4 号] 交渉する文化と言語』開拓社, 2010) 所収) などの論文として発表された。そして「18 世紀アフリカ系作家と環大西洋の英文学」を課題とする平成 23~25 年度科学研究費補助金(基盤研究(c))においては、Equiano の自伝を本邦初訳で出版し、長文の解題を付した。

本研究は、以上の成果をふまえて、それを引き継ぎ、さらに深化・発展させるために着想された。発展の方向としては、アフリカ系作家の研究を継続させつつ、特に同時代の白人作家による著述に目を向けることである。特に環大西洋地域を移動して執筆した作家や、この地域を重要テーマに盛り込んだ作品を再検討することである。

また、近年、欧米の英文学研究において Vincent Carretta や Brycchan Carey らに

よって 18 世紀アフリカ系作家に関連する研究、Eve Tavor Bannet らによる 18 世紀環大西洋英語文学に関する研究が相次いで発表されているが、日本国内では必ずしも十分に研究が進んでいない。こうした海外の研究動向も本研究の重要な学問的背景である。

2. 研究の目的

「18 世紀における環大西洋(ポスト)コロニアル英文学」を課題とする本研究は、端的には以下の点を主な目的とする。また植民地主義の時代であった 18 世紀の英語圏の文学を現代のポストコロニアルリズムの観点から環大西洋地域の文学として再検討すること。そして、それにあたって 18 世紀に英語で著述活動を行ったアフリカ系の作家、Ignatius Sancho, Phillis Wheatley, Quobna Ottobah Cugoana, Olaudah Equiano などと同時代の感傷主義や人文主義思想との関連を解明し、主流文学の中に位置づけると同時に、文学のみならず文化的・政治的思潮を射程に入れた上で、この時代の特異性と重要性を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究は、課題に関連する一次資料及び二次資料を収集し、それらを研究代表者が吟味し、整理・分析することによって進められる。分析のポイントとしては、文学作品として同時代の主流文学との関連を念頭に置きながらも、文学とそれ以外の歴史的資料との境界をいったん無効にして、新しい視点から様々な文献の解読を進めることを重視した。

4. 研究成果

(1) 研究計画に従って、18 世紀の環大西洋地域における英語文学の全体像を把握しつつ、未収集のものを中心に資料調査をおこなった。その過程で本研究に重要な示唆を与えてくれた文献として、Felicity A. Nussbaum, "Slavery, Blackness, and Islam: *The Arabian Nights* in the Eighteenth Century" (Brycchan Carey and Peter J. Kitson, eds., *Slavery and the Cultures of Abolition: Essays Marking the Bicentennial of the British Abolition Act of 1807*, Cambridge: D. S. Brewer, 2007, pp. 150-72 所収) が挙げられる。この論文は、近代性のしるしとしてしばしば結びつけられながらも、分析の対象として同時に論じられることの少ない奴隷貿易廃止運動とオリエンタリズムの問題を、ヨーロッパの帝国主義的な力のあり方として対応させて論じている。コロニアリズムと直接に結びつけて論じることのできる西インド諸島を舞台とする文学作品とオリエンタリズムを舞台とする東方物語を比較することによって、これまでの奴隷物語に関する研究に新たな視点が導入できる。実際、ブリティッシュ・ライブラリーでおこなった調査において、この両者が並列されたチャップブック

のコレクションを発見することができた（ブリティッシュ・ライブラリー所蔵 shelf mark: 11621.b.2.）。それは、背文字に“Garlands and Histories”と記された厚さ7～8センチの合本で、一部が破損したものを含めてそれぞれ24頁（一つだけ34頁）の冊子が全部で21冊綴じられている。そのほとんどがニューカッスルで印刷されているので、元の所有者はニューカッスル在住であったと思われる。1770年代から80年代にかけてのものが中心に構成されていて、最初にはRiddle, Puzzle, Jestなどの冊子がいくつか、さらにイングランドとスコットランドの歌集やバラッド集が収められている。これに韻文と散文の“Histories”が続く。そこではフィクションとノンフィクションの区別なしに、サー・ジョゼフ・バンクス（Sir Joseph Banks）の旅行記とダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』（Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*）の要約版などが入り混じる混乱ぶりを示しており、この時代の“history”という語の意味の範囲と『ロビンソン・クルーソー』のような小説の一般庶民への流通のあり方の一端を教えてくれる。こうした“Histories”の中に“The Adventures of Houran Banow, a Turkish Merchant. As related by himself before the Great Mogul”というタイトルの物語が並んでいる。実はこれはシンドバッド（Sindbad）の第3と第4の旅の物語から取られたもので、『アラビアン・ナイト』に収録されている物語がチャップブックとして当時の一般読者に読まれていたことが分かる。また同じ調査では、『淑女の客間』（原題は、*Lady's Drawing Room. Being a Faithful Picture of the Great World. In which the various Humours of both Sexes are display'd. Drawn from the Life: and Interspers'd with entertaining and affecting Novels.* London, 1744）と題する女性読者を対象としたと思われるアンソロジーが発見された。本書は一日目から六日目までの章を区切って、順番にいろいろなタイプの物語を通じて「世界のありのままの姿」を読者に知らせようという、ある種の教育的見地から編まれており、序文によると、現実を映す「鏡」であるだけでなく、そこには「教訓」と「哲学」が少し含まれているという（iii）。韻文も含む9編の物語が収められているが、そのほとんどは、本書の副題に唄われているような“novel”というよりも“romance”に近いものである。その中に『アラビアン・ナイト』の影響を感じさせる二つのオリент物語（“The History of Rodomond and the Beautiful Indian”, “The True History of Henrietta de Bellgrave. A Woman born only for Calamities: A distress'd Virgin, unhappy Wife, and most affected Mother. Wrote by herself for the Use of her Daughter”）が入っている。本書などはおそらく「娯楽と教育」を目的と主張す

る小説の典型的な例であるばかりか、小説というジャンルが成立しつつある時代に段階を踏んでその読み方を読者に手ほどきするレッスンのようなものと言ってもよい。そんな中にも東方を舞台とする『アラビアン・ナイト』由来の物語が入り込んでいたことを考えると、その浸透の具合が想像できるであろう。奴隷貿易廃止運動に関連した物語群、環大西洋を舞台とした物語群とオリントを舞台とする物語群が、近代のヨーロッパにおける植民主義的あるいは帝国主義的な流れに対応しながら、同時に文学史的には近代を代表するものの一つである「小説」の成立とも深く結びついていることが分かる。こうした観点をさらに展開するための出発点として「18世紀の『アラビアン・ナイト』—もうひとつのイギリス小説勃興論」と題する発表をおこなった。

（2）本研究に重要な示唆を与えてくれる作品として、“Obi”または“Three-Fingered Jack”という名で知られる物語群があることを発見した。それはジャック・マンソング（Jack Mansong）という実在の人物を主人公とする物語である。伝えられるところによると、彼は、ジャマイカのブルー・マウンテン地区を拠点として脱走奴隷のマルーンを率いて活動した。物語群の主要なプロットは、英国植民地ジャマイカにおいてこの人物が組織的に繰り返し行う反乱と、それを押さえ込み、首謀者である彼をとらえようとする植民地統治政府の側の戦いとして展開する。注目すべき点は、この人物を主人公とした物語が、散文の小説としてだけでなく、たとえば音楽を伴ったパントマイムなどの舞台作品として上演され、18世紀末からかなり人気をくしたということである。しかもそれらは、白人の作家たちによってヨーロッパの白人の読者や観客たちに届けられた。これは同時代における黒人の表象がどのように流通したのかを解明するために、非常に重要な対象だと考えられる。調査の結果、この方面についての研究は必ずしも進んでいないことが判明したため、今後の重要な研究対象としたい。

（3）本研究期間において、18世紀の英語圏の文学における最大の文人であるサミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson）の召使いとして仕えたフランシス・バーバー（Francis Barber）に関する研究にも着手した。最新の研究である Michael Bundock, *The Fortunes of Francis Barber: The True Story of the Jamaican Slave Who Became Samuel Johnson's Heir* (Yale UP, 2015) によると、彼は1745年頃に黒人奴隷の子としてジャマイカで生まれた。彼は奴隷として主人のリチャード・バサースト（Richard Bathurst）に連れられて1750年にロンドンを訪れる。そして、父親と同じ名前の医師リチャード・バサーストがこの黒人奴隷の子どもに「フランシス・バーバー」という名前を

キリスト教の洗礼を受けさせる。この息子の方のバサーストはさらにバーバーにヨークシャーのバートンで読み書きの教育を受ける機会を与える。バーバーがジョンソンの召使いになるのは、息子の方のバサーストがジョンソンとの交友があったからである。彼が雇われたのはジョンソンの妻の死の直後、1752年のことであった。ジョンソンもまたバーバーに教育を受けさせる。1754年、父親の方のバサーストの遺言によってバーバーは自由の身分を得る。彼はその後もジョンソンの召使いとして仕えることになるが、二度ジョンソンの元を離れた。一度目は1756年、突然の家出である。ジョンソン邸で同居していたアンナ・ウィリアムズ (Anna Williams) との不仲が原因だとされる。『デイリー・アドヴァタイザー』にジョンソンが掲載した捜索願の広告が残っている。このときバーバーは、ゴフスクエアにある当時のジョンソンの家からほど近いチープサイドの薬屋の元に身を寄せていた。彼はその薬屋で徒弟になることを望んでいたと思われるが、それもかなわず、1758年にはジョンソン邸に戻る。二度目はその直後、バーバーは今度は海軍に志願する。ちょうど7年戦争の時代であり、ジョンソンは彼が海軍に加わったことにひどく心を痛めた。このときジョンソンは、相容れないジョン・ウィルクス (John Wilkes) に取り入ってまで、バーバーを海軍から解任させようとする。無事に海軍から帰ってきたバーバーは、以前のようにジョンソンの召使いとして過ごす。バーバーは白人女性と結婚して、子どもをもうけ、1784年のジョンソンの死に際して遺産相続人となり、年70ポンドの年金を得る。ジョンソンの没後についても、ジョンソン伝を書いたジョン・ホーキンス (John Hawkins) との確執やジェイムズ・ボズウェル (James Boswell) との信頼関係、リッチフィールドに移り住んだバーバー一家を待ち受ける貧困の苦しみ (そのためにジョンソンの形見を売却することになる)。彼は1801年に死去するが、伝記的情報は必ずしも多いわけではなく、ジョンソンの伝記との関わりで記録されている情報を除けば、わずかに自筆の手紙などが残されているにすぎない。しかし、時代を代表する巨人であったジョンソンの傍らに黒人男性の「存在」が確かにあったことは、ジャマイカ植民地の状況、奴隷に対するキリスト教の洗礼、サマセット事件など奴隷貿易廃止運動につながる出来事、英海軍における黒人、ロンドンの黒人コミュニティ、アフリカにおけるキリスト教布教などの問題と結びつき、奴隷制度と植民地主義の歴史がこの時代に確かに刻印されていることを伝えるものとして重要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

久野陽一、「『アラビアン・ナイト』とイギリス小説の勃興」、『日本ジョンソン協会年報』39号、2015、15-18. 査読無

〔学会発表〕(計1件)

久野陽一、「18世紀の『アラビアン・ナイト』-もうひとつのイギリス小説勃興論」、青山学院大学英文学会第47回大会、2014年12月6日、青山学院大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久野陽一 (KUNO, Yoichi)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号：40242888

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者